

中国新聞

広島都市圏

「薬草の里」 飯室で進む

広島市安佐北区安佐町飯室で、休耕田を利用した薬草の特産化の試みが進んでいる。農業を通して障害者の就労を支援する一般社団法人「百人邑」が、健康志向の高まりなどを踏まえて取り組む。徐々に栽培面積を広げ、「薬草の里」にする構想を描いている。

(重田広志)

安佐北区 障害者支援団体が休耕田利用



トウキの生育状況を確認する竹田代表理事



百人邑が出荷しているトウキの湯薬剤とサイコを使ったお香

お香や入浴用 特産化目指す

約40軒の元休耕田を地域住民から無償で借り、血行促進の入浴剤に使われるトウキとお香にするトリラックス効果があるサイコの2種類を育てている。同法人の職員や障害者たち18人が従事。昨年は、事務所で乾燥させるなどして、バック入りのトウキの湯薬剤6個入り(2千円)を千円、サイコのお香12個入り(2千円)を千円で作った。

休耕田の再生と、障害者の働く場の確保を目的に2015年に1ヶ年から始め、面積を地やしてきた。売り上げが好調なことから、4月から事業拡大を目的に資金を募るクラウドファンディング(CFD)を実施。118万5千円が集まった。ことしは、薬草の苗を安定的に育てるためのビニールハウスを設けた。

収穫期となる今年秋には、湯薬剤とお香の出荷量が昨年の2倍に増える見通し。竹田寛二代代表理事(60)は「一年配の方を中心に健康へのこだわりが強まっている。販路を広げ、地域活性化に貢献したい」と話している。